

## 「ゆうゆう あずまや」について

栃木県さくら市建設部都市整備課

### 1. はじめに

さくら市は、栃木県中央部のやや北東に位置し、東京から直線距離で110km~125km圏内で、新幹線と在来線の鉄道利用であれば1時間30分、高速道路利用であれば2時間でアクセス可能であり、首都東京や京浜地区と東北地方を結ぶ東北自動車道路、国道4号、JR東北本線等の主要な国土連携軸上にあります。

市域は2つに大別され、氏家地区(市西部)は関東平野の最北部に位置し、鬼怒川沿いのほぼ平坦な水田地帯であり、喜連川地区(市東部)は高原山の南から延びるなだらかな数条の丘陵と水田地帯からなり、清流と緑の自然に恵まれた地域となっています。

### 2. 整備箇所

今回水辺施設を設置した「氏家ゆうゆうパーク」は、さくら市の南西部に位置し、鬼怒川の河川敷を利用してつくられた約14.8haの都市公園です。自然とのふれあいの場が少なくなりつつあるなか、格好の場所である鬼怒川河川敷に子供たちが街中の公園では味わえない豊かな自然のなかで、色々な体験をとおして遊びを発見することや、大人たちには日光連山や那須連山を背景に鬼怒川のゆったりした流れのなかで一息できる憩いの場を提供しています。また、公園に隣接する桜づつみは全国第1号の桜づつみモデル事業(国土交通省所管)として550mが整備され、その後市町村合併の記念事業としてさらに300m延長して整備され、総延長850mとなった桜づつみに315本のさくらが



位置図(広域図)



ゆうゆうパーク(栃木県さくら市氏家1317)

咲き誇り、市のさくらの名所として多くの人々が訪れる場所となっています。

### 3. 水辺施設の整備

ただ、桜づつみ付近には休憩施設がなく、せつ



満開の桜祭り

かくの自然環境の中で利用者がゆっくりできる場所がない状況でした。そこで、(財)リバーフロント整備センターが(財)日本宝くじ協会の助成を受けて行っている「水辺施設の設置事業」により、桜づつみの最上流部に四阿を設置していただきました。四阿の設置により鬼怒川・日光那須連山・ゆうゆうパーク・桜づつみを一望でき、やすらぎを与える新たな憩いの場が創出されました。市ではこの四阿を親しみのある施設として利用してもらえよう「ゆうゆう あずまや」と命名しました。また、四阿付近ではミヤコグサが生育し始めたため、それを食草としている市の天然記念物に指定されている蝶である「シルビアシジミ」の生息が確認され、自然観察のできる場所にもなりました。

今後も、より多くの方々に利用してもらえよう施設の維持管理や自然環境の保護により一層努めていきたいと思ひます。



四阿全景



シルビアシジミ



四阿利用状況



ミヤコグサ

## 都市の身近な自然を眺める ～東京都葛西臨海水族園～

吉富友恭（東京学芸大学）

東京湾に浮かぶようなガラスドームが印象的な葛西臨海水族園。そのエントランスから中へ進むと、そこには様々な海の生き物の世界が広がっています。そこから少し離れた屋外エリアの一角に、もう一つの見どころ「水辺の自然」の展示があります。このエリアには東京周辺に見られる水辺の自然が人工的に再現され、「流れ」「溪流」「池沼」といった特徴の異なる3つのゾーンが設けられています。「水辺の自然」では、水質汚濁がまだ進行していなかった昭和30年前半に多摩川に生息していた魚類を中心とした生物を飼育展示しています。完成から約20年。「水辺の自然」は時間をかけて成長し、現在も飼育員が手入れをしていますが、手を離れたところでも自然本来の力によってどんどん変化してきているようです。

河川の中流域をイメージした「流れ」のゾーンでは、延長200mの人工河川の石礫の粒径や水深を変化させ、瀬と淵が再現されています。瀬にはオイカワやシマドジョウ、淵にはギンブナやニゴイ等が、それぞれの環境に適応して生息しています。

植栽した植物も育ち、多くの生物が定着しています。放流した魚も再生産されるようになり、ジュズカケハゼやギバチ等の多くの魚種の繁殖が確認されているとのこと。タイコウチやミズカマキリ、アズマヒキガエル等、岸辺近くに生息する生物も順調に再生産しているようです。

陸上から水面下の生物の様子をじっくりと観察することは容易ではありませんが、水辺の展示の一区間には淡水生物館が設置され、池沼、溪流の水中の様子がガラスの壁面を通して間近に



水辺の自然



流れ



淡水生物館入り口

観察できるようになっています。美しい婚姻色をもつオイカワの産卵期である初夏には、ガラス越しに産卵行動を観察することができます。このような水の中での生物との出会いは、この展示ならではの体験といえるでしょう。

## ■ 展示を活用したプログラム

水族館の大きな役割の一つに環境教育があります。葛西臨海水族園では、展示を活用した様々なプログラムが展開されています。「水辺の自然」も環境学習の場として活用されており、夏には「流れ」の中を歩きながら生物と触れ合う体験型プログラム「リバーウォーク」が実施されています。体験後の調査によると、このプログラムの体験は多くの参加者にとって強く印象に残るもので、川遊びに出かける動機づけにもなっているようです。水族館での体験が実際の水辺での体験へと発展していく理想的な実践といえるでしょう。

## ■ 施設の設立

昭和56年、上野動物園開園100周年記念事業として臨海水族園建設構想が策定され、昭和59年に臨海水族園を葛西臨海公園内に建設することが決定されました。平成元年に開園。元々は東京都が所管する施設でしたが、現在は財団法人東京動物園協会に運営が引き継がれています。「人と海の交流の場」をメインテーマとし、世界の海、そして、東京の海を紹介する葛西臨海水族園では、魚類、鳥類、爬虫類、無脊椎動物あわせて約1180種の生物が飼育され、うち約530種が展示されています。

## ■ 施設の見どころ

「水辺の自然」へは、ガラスドームの本館から外に出て、出口の手前右側の通路から入ることができます。淡水生物館には新しく田んぼコーナーも設置され、水田の環境に依存する身近な生物を観察できるようになりました。屋外には他にも「西なぎさ」のエリアもあり、ここも



池沼



池沼



溪流



溪流



大洋の航海者（マグロの大水槽）



ペンギンの生態

多くの野鳥や干潟の生物が観察できる穴場となっています。季節の見どころについては隔月で発行される「なぎさ通信」に詳しく紹介されています。葛西臨海水族園には、マグロが群遊する2,200トンのドーナツ型の大水槽のある「大洋の航海者」、日本最大級の「ペンギンの生態」の展示コーナーなど、多くの見どころがありますが、水辺の自然の変化を実感できる屋外エリアにもぜひ立ち寄ってみて下さい。



水辺の自然の入り口

### 東京都葛西臨海水族園

所在地 /

〒134-8587 東京都江戸川区臨海町62-3

TEL / 03-3869-5152

開館時間 /

9:30 ~ 17:00 (入園は16:00まで)

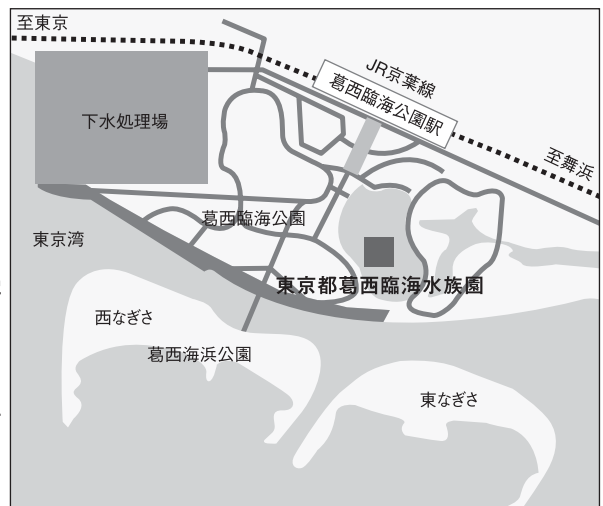
休園日 / 水曜日 (国民の祝日、振替休日、都民の日の場合は、翌日)、年末年始 (12月29日 ~ 1月1日)

入園料 / 一般700円、中学生250円 (小学生以下、都内在住・在学の中学生は無料) 65歳以上350円

アクセス / (1) JR京葉線「葛西臨海公園駅」下車、徒歩5分 (2) 地下鉄東西線「葛西駅」「西葛西駅」下車 バス「葛西臨海公園行き」 (3) 車：首都高速道路湾岸線葛西ランプより5分

施設に関する情報 /

東京都葛西臨海水族園 <http://www.tokyo zoo.net/zoo/kasai/index.html>



ビル影を深く沈めて寒運河

「舟遊び」といえば夏の季語だが、「舟」は季節感を上回る旅情と余韻を持った言葉だ。芭蕉曰く、舟の上に生涯を浮かべたのである。舟は、私の生涯を浮かべるゆりかごでもある。

まだ寒の真つただ中の風の強い日、勝どき橋から浜松町へと舟遊びをしてきた。国内に二艘という電気ボートで、運河を巡る小さなエコ・クルーズがあるというので早速乗船したわけ。コレハシゴトデス。

勝どきマリナーで簡単なレクチャーを受け、ベルト式の救命具を着けたら早速ボート

# 水辺のアルバム

## 運河ゆく

鈴木 ひかり

へ。十人でぎゅぎゅっとコンソメになる。えらく着込こんで行ったが、ボートはパリのカフェみたいなビニールの壁があり、寒風の直撃はないと知って大安心。緊張も心もほぐれ、解放気味に……デモコレハシゴトデス。

着込むからなお狭い。隣の御仁と互いに窓を振り返る瞬間は恋人接近、鼻先三寸の距離となる。ノアの方舟、呉越同舟、タイタニック号……、船ほど乗り合わせたことに運命や絆を感じやすい乗り物はない。大げさに言えば、生死を共にした仲間ということか。だが不思議とジェット機で乗り合わせるより、小型ボートの方がより一層、一緒であることを実感する。生死という「重大さ」より、同じ波に同時に揺られるという「実感」でシンクロする方が絆は深まるということか。

「普段は風速五メートル以上の日は危険なので欠航にします。今日の風速は七〜十メートルくらいですが、まあ、たぶん、大丈夫です。」

にやりと笑いながら、でも眼は用心深く水面を見渡す船長さんは、「NPO法人あそんで学ぶ環境と科学倶楽部」のインストラクターの中林裕貴さん。水辺のエコツアーの一人者だ。東京の水辺は彼の庭だ。

電気ボートはけたたましいエンジン音もなく、すうっと棧橋を離れた。すぐ目の前の水門をくぐりながら壁面についたフジツボ

や牡蠣など観察する間も、くるくると水流にかき回される洗濯物のようにボートの船先が定まらない。

「水門を出ると揺れますよ」と告知され、次の瞬間には大波をザブンと乗り越えた。「きゃあ」と円座の一同が目線を変わす。

ガラパゴス・クルーズの着岸用の小型ボートを思い出す。あの時のペリカンの代わりに、目の前にユリカモメがゆらゆら波に振られている。すぐ足下に、アシカやペンギンが泳ぎ回るドキドキな感じを思い出す。旅の記憶は私を興奮させる。一波で、すでにハイ！

この大波は、前方を大型のボートがよぎった余波を受けたもの。普段、仕事でも家庭でも、いろんな「余波」を受けて生活しているけれど、波として受ける余波は久しぶりで新鮮。普段、言葉として使う余波よりずっと、「ままならなさ加減」が強力な印象を受けました。生活に起きる数多の余波は、経験から

予測がつくようになる。大風は止んでもしばらく波立ち、大きな船が横切ったら、後には山脈のような水の壁がやってくる。だから自分から波風は立てないこと。自分が人の前を横切るときは、そっと、そっと……がモットーだ。小気味よく颯爽と過ぎ去った少し後ろで、誰かがもんどりうってひっくり返っていないとも限らない。後方どころ

か、最近では地下鉄の乗り換えで、巻髪の綺麗なお姉さんに真正面から特攻を受けることあり。「幾らなんでも少しはかわすかな」と思ったら大間違い。最初は信じられない！と感情に余波が残りましたが、最近では「あれば牛だ！荒れ狂う雄牛なのだ！」と思うことにして、マタドールよろしく、こちらが巧みに身をひるがえすのが上手くなった。それでも避けた途端に別の人を弾き飛ばしたりして、自ら余波を生んでしまうことも……。

君子危うきに近寄らず。せつかくしつらえてくださった女性専用車両を利用し、一番後から下りて、ゆっくり、ゆっくり、人の塊から少しでも外れて、一匹で泳ぐのが一番だ。ああ、この有家無家の蠢くエネルギーが勿体ない。毎朝のラッシュアワーを見るたび、エネルギーの宝庫に見えてしまう。精力善用 自他共栄……、とは「柔道の父」、嘉納治五郎先生のお言葉なり。

運河の交差点で突然視界が開けた。振り仰ぐ蒼穹。周囲の景色を平等に見せよつと、ボートはその場でゆっくり旋回した。ああ太平洋クルーズで天然プラネタリウムを見た時も、船長がサーピスでビルのような巨大な客船を旋回させてくれたなあ。

水上からみやるビル群は、丸の内のフォーマルや新宿のクールな雰囲気とまた違う。寒風に磨かれたビルはキラキラ、ニコニコし

ている。運河に反射した冬日が、再びガラスのビルに反射して、コンクリートやアスファルトに半透明の影絵をゆらゆらと映し出している。空と水とビル群が、微笑み返しのキャッチボールを繰り返しているようだ。遠く喧騒をよそに水上は静か。大都市東京であることが嘘のようだ。水路は素敵な穴場だ。

巨大都市東京は、人の手で作られた街だ。江戸時代、人の移動や物流のために、幕府は河川を改良し、運河として整備した。もともと船を通すために作られた船のための水路だ。隅田川・荒川・江戸川・利根川・神田川・日本橋川・小名木川など、昭和の初めまで、沢山の船が行き交っていた。戦後、モーターゼーションの発達で舟運からトラック輸送へ切り替わり、高速道路で覆われて水面が死角になり、水路は存在感を潜めてしまった。今も合流式下水道により、下水がオーバードローすると、川に生活排水の一部が流れ込む。汚いイメージがあったが、実際には透明度は2〜3メートルもあるという。野鳥や水生生物の宝庫で、整然としつつも、少し目を凝らせば漲る生命力がそこに宿っている。

ここに自家用ボートを浮かべ、文庫本と保温マグに入れた珈琲と、ボサノヴァが数曲あればいい。波間のユリカモメと添い寝の午睡から、時々「余波」のゆりかごで目覚めた

い。静けさはまるで、メトロポリタンの遺跡にいるようだ。

忙しなく衝突と爆発を繰り返す大都会の波動が、遙か遠く夢の名残に感じる水面。水は、人の情念を吸いとって中和する作用がある。心の透明度が落ちてきたら、この穴場で、江戸の息吹を感じる水辺で、川風に撫でられてみてはどうだろう。人も水も街も地球も、一繋がり自分の皮膚だと実感できるはずだ。

NPO法人あそんで学ぶ環境と科学倶楽部  
<http://enjoy-eco.or.jp/index.html>



### 鈴木ひかり

東京生まれ。独り旅、裏千家茶道と伝統俳句をライフワークとする。伝統文化を通じて国際交流や地域ボランティアを展開中。近年、旅行記「エッセイ」の執筆を手掛ける。

# BOOK

## 文献紹介



歩けば江戸・東京の歴史と文化  
が見えてくる

### 神田川 再発見

神田川ネットワーク 編  
東京新聞出版局 刊  
B5判 208頁  
定価 1,500円(税込み)

神田川水系の歴史と文化を、川を愛する仲間たちが5年の歳月をかけて徹底踏査したデータ約1000項目、写真150点、江戸名所図会29点。散策の楽しさを増す詳細マップ付き。神社仏閣はもちろん、橋の名のひとつひとつにも興味深い由緒来歴がある。ウォーキングのガイドブックとしてだけでなく、神田川水系を知る資料としても手元に置きたい一冊。

#### 【目次】

第1章 神田川上流部      第2章 神田川都心部

第3章 善福寺川      第4章 妙正寺川

第5章 日本橋川      第6章 思い出の川筋

付 隅田

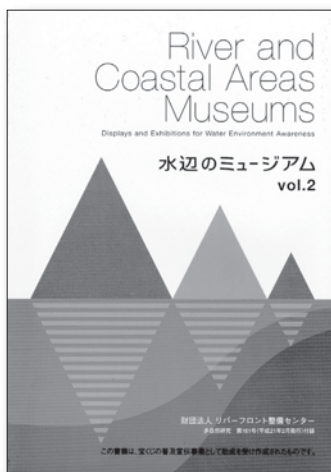
コラム

お求めは、お近くの書店か東京新聞販売店で。または東京新聞出版局業務部(電話 03-6910-2527)か神田川ネットワーク(電話 03-5377-1070)へお申し込みください。

神田川ネットワーク事務局

〒166-0004 東京都杉並区阿佐谷南1-15-6 和久井ビル2階 地位協議会内

電話 / FAX 03-5377-1070



### 水辺のミュージアム vol.2

River and Coastal Areas Museums vol.2

監修 吉富友恭 (東京学芸大学准教授)  
発行 (財)リバーフロント整備センター  
A5判 76頁 フルカラー (無料、送料別)

#### 【お問合せ】

本書は書店で販売しておりません。  
(財)リバーフロント整備センター 丹内・石井 まで  
TEL 03-3265-7121 FAX 03-3265-7456

本書は全国の「水辺」にかかわる資料館・博物館の中から特色のあるものを「水辺のミュージアム 新発見!」として、『多自然研究』に紹介した記事をまとめたもので、平成19年9月に刊行した書籍“水辺のミュージアム”に続いての第二弾になります。

「水辺」は時間的・空間的にダイナミックに変化していて、日々異なる一面を見せてくれます。例えば、水辺は洪水の時もあり、渇水の時もあり、場合によっては人間の生命を脅かすことがあります。また、上流、下流など場所が変われば、水辺の性格が異なります。この変化を知ることは「水辺」の本質を知る第一歩で、水辺と良い付き合いをする上で重要なことです。前回書籍では、一見して捉えにくい水辺の魅力

が展示方法や解説を工夫して分かりやすく紹介しているミュージアムを紙面が許す限りご紹介致しました。本書では、前回に紹介しきれなかったミュージアムを追加して、ご紹介しております。

水辺はたくさんの顔を持っています。みなさんの知っている水辺はどんなものですか? 本書を手にとって水辺のミュージアムへ出掛けてみましょう。あなたの知らない水辺を発見できるかも知れません。そして、水辺の魅力を感じたら、実際の水辺にも触れてみましょう。あなたのお気に入りの水辺がそこにあるかも知れません。

水辺の魅力を少しでも感じて頂ければ幸いです。

#### 【主な目次】

##### 水辺のミュージアムマップ

- 01)千歳サケのふるさと館
- 02)物部長穂記念館
- 03)アクアマリンふくしま
- 04)茨城県霞ヶ浦環境科学センター
- 05)埼玉県立川の博物館
- 06)東京都葛西臨海水族園
- 07)東京都水道歴史館
- 08)目黒区立川の資料館

- 09)相模原市立相模川ふれあい科学館

- 10)金原明善記念館

- 11)下水道科学館(名古屋市)

- 12)兵庫県立コウノトリの郷公園・豊岡市立コウノトリ文化館

- 13)徳島県立「渦の道」

- 14)島根県立宍道湖自然館ゴビウス

水辺に求められるインタープリテーション  
全国の水辺のミュージアム

## 多自然研究はこんな情報誌です

読者の方々からの投稿により紙面を構成します。

『多自然研究』は『多自然研究ネット』に登録していただいた方々の情報交換・交流・発表のための雑誌です。情報を全国に伝えたい人に、集めたい人に、知りたい人にフルに活用していただきたい『多自然研究』です。多自然研究は幅広いネットワークの情報誌

『多自然研究』は『多自然研究ネット』に住所、氏名等に登録していただければどなたにでもお届けします。全国の研究者、研究機関、活動グループ、コンサルタント、行政部局、企業、川づくりに関心を有する方々などを幅広くネットワークします。

毎月1回お届けします

『多自然研究』は毎月1回、年12回発行します。ですから、新しい情報が全国に素早く伝わります。『多自然研究』はリバーフロント整備センターから皆様へ、毎月直接郵送によりお届けします。

## 登録の方法

登録は簡単

『多自然研究ネット』への登録は簡単です。葉書に住所、氏名、連絡先、自己PR、会員の種別（法人・個人）をご記入の上、リバーフロント整備センターあてに投函して下さい。当センターへ到着した翌月から多自然研究をお送りします。なお、毎月25日以降の到着分の葉書につきましては、事務手続きの都合のため、翌月扱いとさせていただきます。また、特にお申し出のない限り、登録は継続させていただきます。

会費

年会費（4月から翌3月まで）は、個人会費が3千円、法人会費が1万5千円です。グループの方は個人、法人のどちらでも登録できます。なお、年度途中の退会の場合、一旦納入された会費はお返ししません。

特典

「多自然研究」に掲載された原稿執筆者には、**図書カード¥3,000円を贈呈**します。

「多自然研究ネット」会員の皆様の投稿をお待ちしています。

会費の振込

年会費の振込は、毎年6～7月に郵便局の振込用紙をお送りします。事務処理上、特に支障がない方は、この振込用紙を使ってお振込みください。振込手数料はかかりません。なお、近くに郵便局がない方、事務処理上銀行でないと困る方は、下記の口座にお振込下さい。

みずほ銀行新橋支店 普通預金 1724589 財団法人リバーフロント整備センター

三菱東京UFJ銀行本店 普通預金 7659022 財団法人リバーフロント整備センター

郵便振替貯金 00180-3-405375 財団法人リバーフロント整備センター書籍口

なお、新規に登録いただいた方には、当センターより請求書、振込用紙をお送りいたします。

## 投稿のルール

投稿はご自分やご自分の所属する団体の活動、研究の成果を会員に広く知っていただくことを目的にしています。上記の趣旨に合致しない場合は掲載いたしません。また、紙面の都合上、投稿の一部しか掲載できない場合があります。これらについては編集部が判断しますのでご了承ください。

投稿の受付は随時行っていますので編集部までお問い合わせください。

【お問い合わせ】

財団法人 リバーフロント整備センター 多自然研究編集部 丹内、伊藤（将）

tannai-m@rfc.or.jp

---

## 多自然研究 第162号

平成21年3月1日発行

編集 財団法人 リバーフロント整備センター 多自然研究編集部

発行人 竹村 公太郎

発行所 財団法人 リバーフロント整備センター

〒102-0082 東京都千代田区一番町8 一番町FSビル3階

TEL 03-3265-7121 FAX 03-3265-7456

ホームページアドレス <http://www.rfc.or.jp/>

印刷 西印刷株式会社

---